

第三百三十八話 烈々たる殉国の想いが我が国の名誉を守った

前話では陸軍軍人を探り上げたが、今回は海軍軍人である。日本軍初の特攻兵器である、所謂人間魚雷と云われる「回天」に携わった二名の海軍軍人を探り上げる。

1 回天とは

「回天」という名称は、幕末期の軍艦「回天丸」から取って命名したとも云われるが、開発に携わった黒木博司中尉は「天を回らし戦局を逆転させる（天業を既倒に挽回する）」という意味で「回天」という言葉を使っていた。

1944年（昭和19年）7月に2機の試作機が完成し、11月20日のウルシー環礁奇襲で初めて実戦に投入された。終戦までに420基が生産された。回天は超大型魚雷「九三式三型魚雷（酸素魚雷）」を改造し、特攻兵器としたものである。回天はこの酸素魚雷を改造した全長14.7m、直径1m、排水量8tの兵器で、魚雷の本体に外筒を被せて気蓄タンク（酸素）の間に一人乗りのスペースを設け、簡単な操船装置や調整バルブ、襲撃用の潜望鏡を設けた。炸薬量を1.5tとした場合、最高速度は55km/hで23キロメートルの航続力があった。ハッチは内部から開閉可能であったが、脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否にかかわらず乗員の命はなかった。

回天が実戦に投入された当初は、港に停泊している艦船への攻撃、すなわち泊地攻撃が行われた。最初の攻撃（玄作戦）で給油艦ミシネワが撃沈されたのをはじめ、発進20機のうち撃沈2隻、撃破（損傷）3隻の戦果が挙げた。米軍は、この攻撃を特殊潜航艇「甲標的」による襲撃と誤認し、艦上の兵士はいつ攻撃に見舞われるかという不安にかられ、泊地にいても連日火薬箱の上に坐っているような戦々恐々たる感じであったという。しかし、米軍がこまめに防潜網を展開するようになり、泊地攻撃が難しくなってきたから、回天による攻撃は水上航行中の船を目標とする作戦に変更された。



2 黒木博司海軍中尉：回天特攻が創案された理由（164～165p）

回天を創案し、回天特攻の訓練に全身全霊の超人的な努力を傾注し、昭和19年9月6日、訓練中に真先に殉職したのが黒木博司海軍中尉（死後少佐）である。黒木は、大東亜戦争を日本の天命と捉え、「神武肇国以来の最大国難」と見、「一度敗れなば、永久に世界より抹殺される」と観じたという。それ故、日本を滅亡させないためには「必死の戦法」を採る以外なしと思ったと云う。回天特攻を自ら敢行することにより、海軍を挙げて航空特攻に立ち上がる礎たらんと願ったのである。

「今や今死もて仇（あだ）うつ他（ほか）に何皇国（すめくに）護る道あらめやも」

3 仁科関夫海軍中尉：我が国の「有条件降伏」を導いた回天将校（166～167p）

訓練中に殉職した黒木少佐の遺志を受け継いだのが、盟友、仁科関夫海軍中尉である。黒木と肝胆相照らした仁科は指導教官として後進の訓練に全力を尽くした。

昭和19年11月8日回天特別攻撃隊菊水隊が出撃した。第一回出撃者12人は仁科が選んだ。先頭に立つのは仁科である。全員「七生報国（しちしょうほうこく）」と墨痕鮮やかな白鉢巻きを締め、仁科は黒木の遺骨を納めた白布で包んだ小箱を首につるした。部隊の全員、基地である大津島（山口県徳山市）の人々、女子挺身隊らがこみ上げる嗚咽を懸命にこらえて見送った。11月20日、菊水隊はウルシーに停泊する米艦隊郡に突入した。12艇中5艇が突撃に成功、数隻を瞬時に撃沈した。仁科は先陣を切り見事命中した。時に21歳であった。

「君が為只一筋の誠心（まごころ）に当たりて碎けぬ敵やあるべき」

* 青年のこの純粋な殉国精神に感動せぬ者はなかるう。軍事的効果は兎も角、大和男子の心意気が世界の感動を呼び起こし、日本の名誉は保たれたのだ。忘れてはなるまじ。

（第三百三十八話 了）